

出会い、ふれあい、心の輪



〈完全参加と平等〉

令和7年度入賞作品集

心の輪を広げる体験作文
障害者週間のポスター

令和7年11月

富 山 県

目次

心の輪を広げる体験作文入賞作品

最優秀賞

小学生の部

障害という言葉のない社会へ

立山町立立山小学校 六年

間野允稀

………1

中学生の部

思いやり

富山市立大沢野中学校 一年

大泉徹馳

………3

高校生の部

ちがい

富山県立南砺福野高等学校 三年

宇野心優

………5

一般の部

社会とのつながりを作るには？

荒井勝幸

………7

優秀賞

小学生の部

みんなやさしいよ

中学生の部

介護のお仕事体験

高校生の部

理解するための努力

助け合うことの大切さ

障害者週間のポスター入賞作品

最優秀賞

中学生の部

共走

黒部市立明峰中学校 三年

辻石心乃李

射水市立大島小学校 二年

谷口結愛

富山市立大沢野中学校 一年

くるま 車
さ 紗
ち 知

富山県立南砺福野高等学校 一年

富山県立南砺福野高等学校 二年

西^{にし}河^{かわ}
川^{かわ}合^い
和^わ祐^{ひろ}
秦^{かな}和^と

[illegible]

16

優秀賞

中学生の部

人と人をつなぐぎずな

助け合うまちづくり

射水市立新湊南部中学校 二年

射水市立新湊南部中学校 一年

尚^{しょう} 森^{もり}
和^わ 田^た
奏^そ あ
菜^な い

..... 17



参考資料

令和七年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領 18

令和七年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況 22

令和七年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿 23

本作品集に掲載する作文は、明確な誤字等以外は原文のまま掲載しています。

「障害という言葉のない社会へ」

立山町立立山小学校 六年

まの みつき
間野允稀

障害がある人と共に生きるということは、お互いに助け合い、それぞれが自分らしく生きることだと思います。

僕は、母と買い物に行きました。その時、車いすに乗った人が困っていました。その人は荷物が車いすの下に落ちてしまっていました。その荷物を取ろうとしていましたが、車いすに座ったままだと重くて持ち上がらないようでした。僕は、側に行って荷物を取るのを手伝いました。その様子を見ていた母が僕に聞きました。

「あなたは、障害者だから助けたのか困っていたから助けたのか」と聞かれました。そして僕は、「僕は困っている人がいたから助けたんだよ」と言いました。

僕は、母がそんなことを聞いた理由を尋ねるとアンコンシヤスバイアスがないか確認したかったと言っていました。アンコンシヤスバイアスとは相手に対する勝手な思い込みや偏

見のことを言うようで、お母さんは障害があるから助けたんじゃないかと思つて聞いたようです。

母がそんなことを言ったのも、母の職場に車いすの人がいるからだそうです。最初にその人が来た時に私はどうやって一緒に働けばいいんだろうと思つていたのですが、一緒に働いていくうちに特別なことは何もしなくていいということが分かったそうです。車いすの通道路のじやまになる物を置かないなどは気をつけたけどそれ以外は他の人と同じように接しているそうです。

話を聞いたことをきっかけに、ぼくは障害のある人とうやうやって過ごしていけばいいかを考えました。障害のある人には、苦手なことやできないことがあるかもしれない。同じように僕にも苦手なことはある。それは、障害のあるなしではなく、その人の特性だ。だからお互いの個性や特性を知って

補い合うことが大切なことだと思いました。障害があるからといって、なんでもできないと決めつけることや、なんでもやってあげることとはあまり良くないと思います。僕もすごく難しいことがあっても苦労してやりとげた後には達成感があります。それは僕たちも障害者の人も一緒です。そう思った時に障害とは障害者と僕たちとの間の見えない壁のことだと思えます。だからこそ僕たちはその壁をなくしていかなければなりません。壁を越えてお互いに分かり合える社会にしていきたいと思います。

【中学生の部】〇最優秀賞

「思いやり」

富山市立大沢野中学校 一年

おお いずみ てっ た
大 泉 徹 馳

私には、六年生の頃に重い病気をもっている友達がいまいた。初めて出会ったのは小学校一年生のときでした。そのときは、彼がどのような病気かも知りませんでした。ただ大きなリュックを毎日背負っていて、鼻にチューブを入れていたことを覚えています。しかし、毎日元気いっぱい、友達ともたくさん話していて、重い病気とは思っていませんでした。学年が上がって彼と同じクラスになったとき、先生がみんなに話してくださいました。

「Aくんは病気をもっていて、リュックの中には命に関わる大切な物が入っています。だから、彼のリュックをいじったり、遊んだりするのは、絶対にやめて下さい。」

私は、その話を聞いて、はじめて彼の病気が命に関わるものだと知りました。そしてその思いと同時に、Aくんのために何かできることがないかと考えるようになりました。

きっかけは、階段の上り下です。私は同級生と比べて身長が小さいほうでしたが、Aくんはもつと小さかったです。そして病気のため力も弱く、あまり重いものを持てません。しかし彼は毎日自分の身体くらいの大きさのリュックを背負っていました。そのため階段では、とても重たそうにゆつくりと上っていました。それを見て私は、Aくんのリュックの底を優しく持つてあげました。Aくんは私の方を見て、「ありがとう」と笑ってくれました。それ以来、彼が階段を上るときは、できるだけ、手伝うように心がけました。

また運動会では、特に移動が大変でした。Aくんは身長順で、いつも私のとなりです。ダンスをするときは、グラウンドを移動する必要があります。Aくんは大きなリュックを背負っているため、早く移動ができません。ここでも私は、Aくんの背中をそつと押して、移動しやすいようにしました。

そのときも彼は、笑顔を返してくれました。

もし私だったら、あんなに大きなリュックを背負ってまで、学校や運動会には行きたいとは思いません。でもAくんは元気に学校に来ていました。だから私もAくんといっしょにがんばりたいと思いました。

私だけではなく、クラスでは、Aくんのためにみんなが、協力していました。Aくんのがんばりが私だけではなく、みんなにも伝わったからだと思います。

私はAくんと生活した六年間で、人の命の大切さや協力することでき起こる力を学ぶことができました。

卒業式の後、Aくんのお母さんから「六年間ありがとう。」と言われ、良い気持ちになったことは忘れられません。

Aくんとは、別の中学校へ進学し、はなれてしまいました。彼はどうしているのか、時々気になります。

【高校生の部】〇最優秀賞

「ちがい」

富山県立南砺福野高等学校 三年

宇野心優

私が訪問介護の実習で出会った、視覚障害を持っているお兄さんと障害を持っていない弟さん達の介助を通して目が見えている人と目が見えていない人のちがいということについて考えさせられる実習になりました。

その兄弟は、年の近いお兄さんと弟さんでした。お兄さんは全盲で全く目が見えていない。一方で、弟さんは視覚の障害はなく、日常生活をある程度、問題なく送っている。この情報を職員の方に聞いた時、私は、「弟さんがお兄さんの面倒を見ているのだろう」と勝手に思い込んでいました。しかし、実際に実習でその方たちの自宅に伺ったとき、二人の関係は、「支えている人」と「支えられている人」という一方通行ではありませんでした。たしかに、弟さんはお兄さんの生活をサポートしていました。食事の準備や皿洗いなど日常の中で自然に手を差し伸べていました。職員の方は、食品や日用品

の買い出し、訪問した時にバイタルチェックなどしていました。しかしその一方で、弟さんが落ち込んだり、一人になっているときだったりなどしている時、お兄さんが声をかけて励ましていたそうです。職員の方と買い出しに行く前に弟さんに「何か食べたいものはありますか？」と聞くと、「コーラとクリームパンが食べたい」とおっしゃられました。そして弟さんが「兄にも食べたいもの聞いてやって」と言われました。お兄さんにも「食べたいもの何かありますか？」と聞くと、「サンドウィッチとおかきとお茶が欲しい」とおっしゃられました。そしたらお兄さんも「弟にも何か食べたいものあるか聞いてみて」とおっしゃられました。この言葉を聞いて、私はびっくりしました。お兄さんはとても落ち着いた雰囲気、周りの状況や人の気持ちなどとても敏感に感じるそうです。職員の方にこれを聞いた時、目が見えない分、声の

トーンや空気の変化で相手の感情を察しているのかなと思いました。だから弟さんのことを考えて「欲しいものないか聞いて」と声をかけてくださったのかなと思いました。

障がいがあるということは、「できないことが人より少し多い」というだけで、「人として劣っている」ということではないと感じることができました。むしろ、視覚に頼らずに生活しているお兄さんは、感覚や思考力、想像力の面で私や職員の方、弟さん以上に豊かに世界を感じ取っているのではないかなと思いました。私はつい、「障がいのある人＝助けが必要の人」と決めつけてしまっていたのですが、本当の関りとは、どちらかが一方的に支える関係ではない。お互いの得意なことや苦手なこと、できることやできないことを理解し、補い合い、尊重しあうことが大切ということを兄弟の姿を通して知ることができたし、教えていただいたと思います。

また弟さんはこのようなことも言っていたそうです。「兄は目が見えないだけで、心は何でも見えている気がするんです。人の距離感とか今何を考えているか、言葉の選び方など、僕よりずっとしつかりしている。」とおっしゃったことがあったそうです。私は職員の方に、移動中の車の中でこのことを教えていただきました。この言葉を聞いて、お兄さんへの強い信頼と敬意が込められているのではないかと思いました。た

とえ目が見えなくても、人を思いやる力、考える力、生きる力があり、その価値を見抜き、お互いに認め合っている関係性がとてもすごいと思いましたし、将来このような関係性を私も自分たちの姉妹で築き上げたいと羨ましく思える自分もいました。

障がいがあるかどうかに関係なく、人はそれぞれ違った形で社会の誰かにどこかで役立てる。大切なのは、見た目や能力の「ちがい」に目を向けて遠ざけるのではなく、その違いの中にある「強さ」や「豊かさ」に目を向けることが大切だと思います。

この兄弟の出会いを通して、短い時間ではあったけれど、私は、人と人の関わりについて、そして自分の中にある思い込みについて、考えて見つめ直すことができました。これから先も障がいのある人となない人が自然に関わりあえるように自分なりに考え行動していきたいと思いました。

「社会とのつながりを作るには？」

あら い かつ ゆき
荒 井 勝 幸

私は5年前にうつ病になり正社員として働いていた会社を十五年で辞めました。その後、寝たきりみたいな生活をしていました。私の家は代々農家で、米を作っております。兼業農家として地元の営農組合に組合員として入会しており、病気になってから農業をすることが出来なくなりました。自治会の役員もこなすことが困難となり、常会もでれず罪無感をかかえて過ごしていました。そんな時にとりの家の人に声をかけてもらいました。とにかく集中できる趣味をもつことがいいと。実はとなりの人も精神病をわずらった過去があり、ゲームなどで気をまぎらわして治したと聞きました。しかし、自分はずつ病の影響もあり、何もしたくなく、テレビやラジオも雑音に聞こえる始末でした。何もかも嫌になり自殺も考えてしまうくらい重病でした。

そんな状態が続き、いつも自殺を考える日々が続き、人生

が嫌になることが多くなり、どうしようもない時になぜか絵を書くことになりました。急に絵を書くことになったのは、やはり、となりの人の言われた集中することを見つけなければと思ったからです。菓子空の空箱のデザインや新聞紙に載っていた人物を片端から書きました。そうすると書いている時は嫌なことをなぜか考えない時間ができました。病院の先生の助言よりも効力がありました。なにげない助言でしたがよかったです。ただ、絵を書く時間以外は、元にもどってしまい暗い考えを考えてばかりです。どうすればいいのだろうかと考えた結果、何かをすることにより、考える時間を少なくすることによりなにかなるのではと思い、散歩しながら、ゴミ拾いをはじめました。よく空缶が捨てられている道路を歩いてひろっていると近所の人に声をかけられて、ほめられました。こんな自分でもほめられて、人の役に立つことができ

てやりがいできました。週一回のペースで行うようになりました。歩道の雑草も気になり、無理のないペースで草を引きぬいたりもしています。意味がないようだけどころのままにしておいたら林みたいな大きさになって見た目が悪い。美化活動だと思ってやりはじめました。自分でも何をしているのだらうと思いつながらしています。ただ、家でいると暗いことを考えてしまい、体を動かすことにより気をまぎらわしているのだと思います。しかし、深夜に寝れずに午前二時にライトを照らしながらしています。自分でもおかしいと思います。変人と間違われても言い訳ができるのか分かりません。

2年前からは、障害雇用で午後から4時間働かせていただいております。となりの人の助言で集中できること見つけるといわれたのが、働けるまでになったのだと思います。ただ、短時間の労働でも、すぐつかれがでます。病気はなかなか回復しません。どうやって集中して仕事をしようかと毎回、悩んでおります。仕事で車で配送する業務もしており、交通安全を最優先しております。しかし、どうしても夜間の寝ぶそくがあり、運転中に眠たくなります。そうしたら途中に車を止めて一時、休んでから運転するようにしています。本当は、夜に一時にごとに起きて散歩したり、読書や音楽を聞いたりするのを止めればいいのですが、落ちつかずに行動

してしまいます。病院の先生には、とりあえず横になってい
るだけでいいと言われるが、どうしても行動してしまいます。
働けずに、布団の中で寝たきりになっていた日々と比べれば
よいとは思いますが、しかし、これも困った問題です。いつ
になったら正常になるのか分かりません。

私には、中学生と小学生の息子がいます。私は、いつも猫
が欲しいと言って、猫の鳴きまねをしてストレスを解消して
いますが、これが父親だと思ってふれあってもらえます。気
をまぎらわすには、何かに集中することととなりの人に教え
てもらいましたが、やり方が間違っているのかと考える日々
です。しかし、今は、仕事を短時間であれ、こなせていること
を考えると社会に少し復帰できたのはとなりの人の趣味やゲ
ームをして集中しなさいと言われたのが良かったとお礼を言
いたいと思います。

「みんなやさしいよ」

射水市立大島小学校 二年

たに ぐち ゆう あ
谷 口 結 愛

わたしは、年中のときから、おやべしでとりくんでいるフライングディスクこうりゆう会にさんかしています。さいしよは、おばあちゃんがお手つだいに行くのについていっていました。

そこには、しょうがいのある人がたくさんかしています。目が見えにくい人や車いすの人、耳がきこえない人、手がない人などいろいろな人です。でも、フライングディスクはみんなでのしめます。フライングディスクは、丸いわっかにフリスビーを通します。10回なげて、たくさん通った人がかちです。しょうがいがある人でもかんたんにできます。

わたしがはじめてフライングディスクをしたときは、足がわるい人になげ方を教えてもらいました。はじめは、なかなかわっかに通らなかったけれど、いろいろな人がアドバイスをしてくれて、だんだん上手になりました。きょうぎのお手

つだいもできるようになりました。きろくをするとき、目が見えにくい人には通ったか、はずれたかをつたえます。耳がきこえない人には、なん回なげたかをすう字を書いたカードでつたえます。いろいろなふうをすること、みんなでのしんでいます。

きょうぎのじゅんばんをまっているとき、しょうがいのある人とあそんでいます。目が見えにくい人は、手あそびをしてくれます。耳が聞こえない人は、おにごっこやおいかけてしてくれます。みんなしょうがいのない人とかわからないと思います。みんなとてもやさしいです。

しょうがいがあってもなくても、いろいろなほうで話ができるし、こうりゆうできます。わたしは、これからもフライングディスクこうりゆう会にさんかし、いろいろな人とこうりゆうしたいです。

「介護のお仕事体験」

富山市立大沢野中学校 一年

くるま
車
さ
紗
ち
知

私は初めての中学生の夏休みの思い出として友達と介護のお仕事体験をしました。

場所は富山市にあるながわ光風苑です。

にながわ光風苑は約七十人が入居できる老人ホームで、喫茶店もあり、地域の方々が散歩の途中に立ち寄り、ちょっとした集まりでも利用されたりしています。

仕事体験の内容は、オリエンテーションや施設見学、利用者の方をフロアへ誘導したり、コミュニケーションをとったり、夏祭りの手伝いをしたりするというものです。

オリエンテーションでは、会社の理念や、介護保険制度、高齢者の障害の内容や加齢による体の変化を詳しく説明してもらい、車イスや歩行器を実際に使用する体験が出来ました。

利用者の方々はほとんど方々が車イスを使用していて、介助が必要でした。車イスを押す介助は思った以上に重くて、

方向転換が難しかったです。

利用者インタビューの時間には、二人の方にインタビューしました。九十歳の女性は、記憶の間違いがあるかもしれないと、スタッフの方に教えて頂きましたが、笑顔で何でも答えてくれました。もう一人の方は、七十歳の男性で、学校の先生をしていたそうで、頭の回転が速く、質問にすぐ答えてくれました。歌うことも好きな方で、小柳ルミ子さんの「瀬戸の花嫁」を歌ってくれました。

夏祭りの手伝いでは、利用者の方々とわなげや、ボーリングを楽しみました。片手しか使えない方には、車イスの角度を変えて、投げやすいようにしたり、ボールをひろったりしました。

昼食時も、利用者と一緒に食べました。自分で食べることが出来ない利用者には、スタッフが一口一口ゆっくり介助す

る様子がみられました。

一日の介護体験で気付いたのは、利用者の方々も、スタッフの方々も、笑顔だったことです。介護が必要になったら何に困るのか、施設で過ごす楽しみは何だろうか、疑問でしたが、実際に身体の不自由な方々と関わると、障害があっても、畑をして収穫した野菜をみんなで食べたり、困っている利用者にスタッフが寄りそったりと、不安な顔をしている人はいませんでした。

今回の介護の体験で、施設長さんが

「最後まで人らしく生きられるように支援しています。」
と言われていました。障害があっても、いきいきと生活が送れる環境をつくるのが大切だと感じました。

「理解するための努力」

富山県立南砺福野高等学校 一年

かわいひろと
河合 祐和

私は、高校一年生で、これまで、障害のある方と関わる機会はあまりなかった。学校の授業で障がいについて学ぶことがあっても、実際に障がいのある方と話したり、一緒に時間を過ごしたりすることはなかったため、どのように接すればよいか正直わからなかった。障がいのある人に対して、「助けが必要な人」「かわいそうな人」といった漠然としたイメージを持っていたこともある。そんな私の考え方を大きく変えるきっかけとなったのが、母の職場を訪れた時の経験である。母は福祉施設で働いており、知的障害のある方々が通っている施設で日々利用者を支援している。ある日、母に誘われて、その施設を見学することになった。最初は気軽な気持ちでついていったが、いざ現場に入ると、何とも言えない緊張感を感じた。施設では、母が利用者の一人である男性を紹介してくれた。彼は知的障害があるということだったが、初対面の

私にも明るく話しかけてくれた。最初のうちは私もどう返せばよいのか分からず戸惑っていたが、彼が自分の好きなアニメや工作について嬉しそうに話す姿を見ているうちに、次第に緊張は解けていった。このとき私は、障がいがあるからといって、接し方を特別に変える必要はないのだと気づいた。確かに、少し時間がかかったり、言葉の理解に工夫が必要だったりする場面もあった。しかし、それは「できない人」として見るのではなく、「できることを自分なりに一生懸命やっている人」として見つめ直すべきなのだと感じた。その後、他の利用者の方々とも少し話したり、作業の様子を見たりすることができた。皆、自分の役割を持ち、清掃や簡単な作業などに真剣に取り組んでいた。その姿勢からは、「障がいがあるから何もできない」といった考えは全く感じられなかった。むしろ、自分でできることを丁寧になし、日々成長しようと

している姿にとっても感銘を受けた。

今回の経験で、私は自分の中にある無意識の偏見があったことに気づいた。「障がいがある」特別な人」「何かしら守ってあげるべき存在」と決めつけていた部分があったのだ。しかし、実際に関わってみると、そうした思い込みは間違いない、あることがよく分かった。障がいがあるかないかではなく、その人がどんな性格で、何が好きで、どんな思いを持っているのかに目を向けることの方がずっと大切なのである。また、私は「どう接していいのかわからない」という最初の戸惑いについても、決して悪いことではないと感じた。知らないからこそ不安になるのは当然のことであり、それをきっかけに「もつと知ろう」と思えるかどうかが大切なのだと思う。何も知らないまま距離をとるのではなく、まずは一歩近づいてみることで、理解が深まり、自然なかかわりが生まれる。これからの社会では、多様性を認め合いどんな人でも安心して暮らせる共生社会を目指すことが求められている。その中で、障害のある人とどう関わっていくかは、私たち一人一人が考え、行動すべきテーマである。特別な支援や知識がなくても、相手に興味を持ち、対等な目線で接することは誰にでもできる。小さな声かけや自然な会話の中から、信頼関係は築かれていくのだと思う。

今回の体験をとおして、私は「障害のある人と関わることは、自分にとっても学びの機会がある」と感じた。相手に何かをしてあげるという一方的な関わりではなく、お互いに理解し合い、人として成長して行く関係が理想である。そのためにも、これからの生活の中でまた障害のある人と出会う機会があれば、今回の経験を思い出しながら、自分なりの関わり方を実践して行きたい。そして、困っている人がいれば自然と声をかけるような人になりたいと思う。障害の有無に関係なく、人と人との関わりは、お互いを理解しようとする気持ちから始まる。今回の経験は、私にそのことを教えてくれた貴重な出来事であった。

「助け合う」との大切さ」

富山県立南砺福野高等学校 二年

にし かわ わ かな
西 川 和 奏

私は、福祉施設のボランティアで耳が不自由なお母さんと出会った。その方には、耳が聞こえるAくんという子どもがいた。私は、遊び場を担当していて、Aくんと一緒に遊んでほしいと職員の方から言われた。私は、Aくんと話している内容がお母さんにも伝わった方が安心されると思い、積極的にジェスチャーを使いながらコミュニケーションをとった。しかし、Aくんと思うように関わることができず、一緒に遊ぶことができなかった。私は、「耳が不自由な方」がおられることを意識しすぎていたのではないかと思った。私が話す相手はAくんだったにも関わらず、お母さん中心にコミュニケーションを行っていたと思った。また、ジェスチャーをすることも大切だが、子ども目線に立って、話すことが大切だったのではないかと感じた。配慮することも大切だが、配慮しすぎることも適切ではないということに気づいた。

また、このことをきっかけに障がいなどで身体が不自由な方が過ごしやすくなるために、社会の中にはどのようなバリアフリーがあるのかを知ろうと思った。

そこで私は、身体が不自由な方はどうのように買い物をしていのかになり、コンビニエンスストアやスーパーなどでのバリアフリーを探すことにした。コンビニエンスストアでは、会計の台に耳が不自由な方が利用しやすいするための「耳マーク」があることに気づいた。このマークのおかげで、その方の意見を尊重して、買い物ができることが分かった。また、レジから店内全体を見渡すことができ、困っている方に支援しやすくなっていると感じた。また、入り口や店内に段差がないことから、歩行障がいがある方や盲者の方などにとっては、利用しやすいところだと思った。しかし、冷蔵食品のドアが硬かったり、商品棚の間のスペースが狭かったり

して、杖を使っておられる方や車いすの方は利用しづらいと感じた。それに比べてスーパーでは、食品棚の間のスペースが広かったり、入り口が自動ドアになっていたりして、利用しやすいと思った。しかし、コンビニエンスストアと比べて店内が広く、レジから店内全てを見渡せるわけではないので、支援が必要としている人がいたとき、なかなか支援が届かないのではないかと感じた。また、これらのバリアフリーは、障がいの有無に関わらず、高齢者や妊婦の方など、すべての方にとって優しいものだと思う。

そんなとき、私はスーパーに行ったときに車いすの男性の方が買い物かごを落としているところを見た。私はその方のところへ行き、商品をかごに戻し、男性の方に渡した。その方は、辛そうな表情で「ありがとうございます。」と言ってくださった。その方は右手でかごを膝の上で支え、左手だけで車いすを動かしておられた。車いすを動かしながら商品の入ったかごを押さえることはとても大変そうに見えた。また、広いスーパーだったため、一人で買い物をするには、とても時間がかかると思った。辛い表情で話されたことから、一人では拾えないもどかしさや苦しさがあったのではないかと感じた。困っていて支援を必要とするとき、支援が必要な人が周りに助けを求めやすい社会を作ること、自分が困ったときにも支援

を受けやすくなると思った。

また、コンビニエンスストアでは片側の手足を動かすにそうにしている方がおられた。その方は、店員さんと協力しながら、ゆっくり一緒に買い物をしておられた。それを見て、過ごしやすい社会にするためには、バリアフリーで支えきれない部分を「助け合い」によって補うことが大切だと実感した。

私はこれらの体験を通して、身体の不自由な人が過ごしやすい社会にするためには、バリアフリーなどの環境を改善するだけではなく、周囲にいる人がどれだけ障がいや病気を理解しているかが大切だと感じた。身体にハンデをもっている人が困ったときに、助け合うことが普通な社会や環境になるべきだと思う。また、配慮をすることは大切だが、配慮をしすぎることは、かえって相手の方を困らせてしまうことにもつながるということを意識して相手の方と接したい。そして、相手の状態にあった支援や手助けをすることが、相手の方にも、自分にとっても良いと思った。

障害者週間のポスター

○最優秀賞

【中学生の部】



「共走」

黒部市立明峰中学校 三年

つじ いし み の り
辻 石 心乃李

○優秀賞

【中学生の部】



「人と人をつなぐきずな」

射水市立新湊南部中学校 二年

もり た
森 田 あ い



「助け合うまちづくり」

射水市立新湊南部中学校 一年

しょう わ そ な
尚 和 奏 菜

令和七年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」募集実施要領

1. 趣旨

障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会を目指し、障害者に対する国民の理解の促進を図るため、「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」を募集するもの。

2. 主催

内閣府、富山県

3. 主管

富山県身体障害者団体協議会

4. 後援

富山県教育委員会、社会福祉法人富山県社会福祉協議会

5. 募集テーマ

(1) 心の輪を広げる体験作文

出会い、ふれあい、心の輪——障害のある人となない人との心のふれあい体験を広げよう——

(2) 障害者週間のポスター

障害の有無にかかわらず誰もが能力を発揮して安全に安心して生活できる社会の実現

6. 応募資格

(1) 心の輪を広げる体験作文

小学生、中学生、高校生及び一般（義務教育学校、特別支援学校の小学部、中学部及び高等部の児童生徒を含む。）

(2) 障害者週間のポスター

小学生及び中学生（義務教育学校、特別支援学校の小学部及び中学部の児童生徒を含む。）

7. 募集の方法

(1) 心の輪を広げる体験作文

① 作文の題名（タイトル）及び内容

作文の題名（タイトル）は自由とし、内容は、障害のある人となない人との心のふれあいの体験をつづったものとする。
なお、応募は、未発表のもの一編に限る。

② 募集の区分

小学生区分、中学生区分、高校生区分及び一般区分の四区分とする。

③ 制限字数、用紙の様式、作成方法等

ア. 一編当たりの制限字数は、小学生区分及び中学生区分については、四〇〇字詰め原稿用紙二〜四枚程度とし、高校生区分及び一般区分については、四〇〇字詰め原稿用紙四〜六枚程度とする。

イ. 用紙は、原則として四〇〇字詰め原稿用紙（B四判又はA四判。縦書き）を使用する。

ウ. パソコン等の電子機器による作成も可とする。この場合、用紙はイ. に準じるものとする。

エ. 第三者が知的財産権を保有する著作物を使用しないこと。

④ 応募者の属性等に関する資料（属性表）

作者の属性表（指定様式）の項目に従い、氏名、住所、年齢（生年月日）、所属先（学校名・学年又は職業）、電話番号、FAX番号、障害の有無・程度、作品の題名（タイトル）及びその他参考となる事項等を記載し、作品と共に提出する。

⑤ 応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇〇〇九四 富山市安住町五二二 TEL〇七六―四四四―〇二二三

⑥ 募集期間

令和七年七月一日（火）から八月二十九日（金）までとする（当日消印有効）。

(2) 障害者週間のポスター

① 作品の題名（タイトル）及び内容

作品の題名（タイトル）は自由とし、内容は、障害者に対する理解の促進等に資するものとし、障害のある人となない人の間の相互理解・交流等を造形的表現で訴えるものとする。

なお、応募は、未発表のもの一点に限るものとし、作品中に標語それに類する文字は入れないものとする。

② 募集の区分

小学生区分及び中学生区分の二区分とする。

③ 規格、画材、作成方法等

ア・規格は、画用紙のB三判（横三六四mm×縦五一五mm）又はいわゆる四つ切り（横三八二mm×縦五四二mm）を使用し、これに満たない作品は、B三判の台紙に貼付する。なお、作品は縦位置（縦長）のみとする。

イ・彩色画材は、自由とする。

ウ・第三者が知的財産権を保有する著作物を使用しないこと。

④ 応募者の属性等に関する資料（属性表）

作者の属性表（様式）の項目に従い、氏名、住所、年齢（生年月日）、所属先（学校名・学年）、電話番号、FAX番号、障害の有無・程度、作品の題名（タイトル）及びその他参考となる事項等を記載し、作品と共に提出する。

⑤ 応募先

富山県身体障害者団体協議会

〒九三〇〇〇九四 富山市安住町五二二 TEL 〇七六―四四四―〇二二三

⑥ 募集期間

令和七年七月一日（火）から八月二十九日（金）までとする（当日消印有効）。

8. 選 定

応募された作品については、審査のうえ、各区分ごとにそれぞれ最優秀賞、優秀賞を九月二三日（月）までに決定し、入選者に通知する。最優秀賞作品は、富山県代表として内閣府へ推薦する。ただし、内閣府では、より多くの方に受賞の機会を設けるため、過去を通して入賞は一度限りであることから、過去の入賞者は内閣府へ推薦しないものとする。

9. 表 彰

富山県で表彰式を行い、最優秀賞受賞者及び優秀賞受賞者にそれぞれ賞状及び副賞（一万円相当、五千円相当）を贈る。
また、応募者全員に参加賞を贈る。

10. 個人情報

応募者に関する参考資料に記入した個人情報はこの募集の連絡や参加賞送付のみに使用する。
ただし、入賞者の個人情報は内閣府への推薦や作品集、ホームページの掲載に使用する。応募者は、あらかじめこの旨同意のうえで応募するものとする。

11. その他

募集作品は、障害者週間行事等の終了時に返却する。

令和7年度「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」応募状況

1 「心の輪を広げる体験作文」応募状況

	計
小学生	2 編
中学生	2 編
高校生	74 編
一般	1 編
合計	79 編

2 「障害者週間のポスター」応募状況

	計
小学生	0 点
中学生	18 点
合計	18 点

令和七年度

「心の輪を広げる体験作文」及び「障害者週間のポスター」審査会審査員名簿

浜谷 尚生

元水橋郷土史料館長

横山 隆宜

富山県有美術品管理事務員

山崎 哲

富山県社会福祉協議会地域福祉・ボランティア振興課長

布尾 英二

富山県身体障害者団体協議会会長

平野 幹夫

富山県手をつなぐ育成会常務理事

中村 喜久男

富山県精神保健福祉家族連合会理事長

麻井 唯翔

富山県厚生部健康対策室健康課主事

梅村 佳絵

富山県教育委員会教育みらい室特別支援教育課指導主事

河尻 茂明

富山県厚生部障害福祉課長

心の輪を広げる体験作文・

障害者週間のポスター入賞作品集

― 出会い、ふれあい、心の輪 ―

令和七年十一月発行

発行 富山県厚生部障害福祉課

印刷 富山生きる場センター